



近世說美少年錄

初集

~ 13
3567
5



門へ 13
號 3567
卷 5

近世談話 少年録第一輯卷之五

東都 曲亭主人編次



神僧歌を詠く解脫を示す
阿夏計を定めく舊怨を盡む

ことき やむらうさぬをいふまじら
十々鬼夜行太野干玉黒之著の兩賊の佛生山る隱宅小阿夏と伴ひ來る
比より或一日或二日送代は挿す小虫を獲物多ければ歸らぬりか有一日黒
云の茶種多く竊を來るを又市よのゆたを活却んとく擇分るる中に
研霜ありあら極めたる毒石をくみさる鳥獸も服する免れがたき病の
症ありて用るるものたるはたきもの物と市にりて賣るる售んとせぬ地
疑れくもふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
幾重ともく帯に包むく。素の地炕の邊る染る吊せ阿夏とく。慾深は

早稲田 大學 図書館
昭和 34 6 3 號
藏 書

告むとも後おあづら知るよしあらんと答く他事紛らり諦く岩間の世は清
 水深く懸そくあられ珠之成らあろるるまひひるら向も果まき西箇の賊身
 護りとも壁お掛る弓と伎前を推方々山をまろく鬼をも射つ鳥をも射る度か
 ま月日を累て潮々お自得き日毎お獲のあまめて這獵りお遊耽り宿
 所あると稀るけり有如此程この年の秋の比夜行太の遠く出き美濃路より
 信濃上野を徘徊し西之月の程お十月の比取りあつ這箇の吉買買の自くて
 遅ける馬一疋と金銀衣裳種々ありを黒くまかせ阿夏おせせ只管技の
 誇りてその中おのと美し紅五色の玉と真紅の緒お申たるあり阿夏これをおに
 合く左なる右なるよとるふその玉と毎小或の山水或の人物宮殿花鳥の録とてか
 どく透徹して鮮明おええへ頻り愛く放ち遣らむ夜行太とてへりく
 あり珍し物お侍の叙早の録おせまはりのて立女お賜へりといふと夜行太
 へむも噫とあのていりて捨賣おせむも百金あるるえの何ぶ叙兒の録
 おせん然れども物お京鎌倉おあるる買つものも亦るへこの後の地にて
 ゆくま姑くおとる預け措くへも雨ゆきまおいそこの阿夏お微笑て世の常言お
 預り取の半分とらおされ西之箇返しゆら下結おこれお興りても妾お要かえ
 のおれいち推けても知るお侍りその折吐るるまところ戯れてそ尻お袖お果
 てるので立たり登時黒云の庭の樹下に敷敷たる彼白馬をえんと哥くよ這箇の賣
 買の近年早き造化より金銀衣裳で物足れお馬の售價をまきこの隠客の
 非常に備ふりや近御り城主お侍る討の兵よまきとも騎馬おあはれた
 身ひとりやく敵十人お當えりといふ夜行太領受てその用心お然るよとら他
 あり十餘あるるの光陰を送れども知るの絶くおまき討の備の遠慮お過ら
 七いともあれのくもあれ馬おとる物お肩りと麓お到る便りより賣らぬ敵お措く

危けり。却説次の日黒云。夜行太。旅の身。准。立代。首途。の祝
 いを。謂。一。宵。酒。の。迷。ん。と。朝。未。明。より。宿。所。を。出。く。麓。の。あ。る。る。里。に。赴。け。酒
 一。樽。と。活。の。と。ま。を。れ。と。の。般。の。足。を。と。め。ま。ひ。里。へ。赴。け。夜。行。太。の。長。途。の。疲。累。
 復。寐。の。枕。鱗。を。納。戸。の。軒。睡。の。声。の。阿。夏。の。今。這。間。を。あ。け。の。ま。は。舞。り。け。る。
 観。音。菩薩。の。詣。ん。と。く。遠。く。背。門。も。あ。る。と。佛。前。の。近。く。隨。ふ。と。え。れ。の。觀。音。然
 たり。一。箇。の。行。僧。眉。秀。眼。清。く。槍。笠。を。仰。が。る。戴。る。面。色。凡。相。を。あ。る。が。鹿。色。
 る。栲。の。衣。の。麻。の。腰。法。衣。を。被。く。細。代。の。笈。の。細。小。を。肩。做。し。百。栲。の。甲。被。脚。絆。
 考。く。杖。を。衝。き。向。て。觀。世。音。の。御。前。の。ま。ま。と。ひ。ひ。り。る。ま。の。ま。れ。の。胸。を。拍。打。し。
 怪。と。あ。ら。ま。恭。く。進。み。對。ひ。て。聖。什。麼。何。処。より。あ。ら。久。到。ら。せ。め。ひ。女。ん。女。を。罪。
 障。深。く。所。以。也。や。寛。家。の。あ。れ。伴。れ。て。こ。い。入。り。より。と。七。輪。の。あ。れ。か。の。く。小

来。れ。る。人。を。ま。の。た。然。と。今。の。う。る。見。ま。あ。ら。ま。の。年。來。信。ま。這。御
 佛。の。導。き。ま。い。杖。有。が。た。ま。尊。く。け。り。ま。女。一。箇。の。男。兒。あ。り。今。茲。九。才。ま。う。傍。
 願。の。聖。の。あ。ん。慈。悲。の。と。俺。們。母。子。を。救。ひ。と。く。竊。の。故。御。送。を。せ。め。ん。ぞ。再。生。の
 御。恩。を。信。り。ん。救。せ。め。と。う。口。説。く。と。法。師。の。清。く。ま。は。ま。と。く。屋。々。嗟。嘆。し。て。そ。も。痛
 苦。の。心。の。こ。れ。い。と。ま。ま。と。く。大。約。皇。國。の。在。と。あ。る。佛。を。拜。せ。ら。ん。と。い。大。願。を。發
 せ。し。深。山。幽。谷。の。至。ま。ぬ。海。岸。崖。の。隙。も。て。佛。像。を。は。を。処。の。索。を。到。ら。ま。と
 と。い。と。ま。然。れ。ば。這。功。徳。の。よ。り。け。ん。人。を。相。と。と。の。人。の。過。去。未。來。を。知。り。と。ま。と
 たり。と。ま。京。師。の。あ。り。し。時。初。の。客。を。く。入。ま。ふ。り。る。の。あ。り。と。ま。ん。心。を。得。る
 心。より。他。一。男。の。あ。り。初。て。岐。道。の。け。る。と。ま。衣。食。の。為。と。一。箇。の。男。の。麻。鞋。を。を
 ぬ。り。垂。れ。又。彼。他。一。風。流。士。と。相。馴。れ。り。子。を。産。た。ま。と。天。の。ん。ん。思。縁。を。れ。
 四。檢。の。月。日。の。夢。と。一。過。く。彼。風。流。士。は。遠。離。し。遂。に。京。師。の。住。ひ。を。と。ま。ら。し。任。せ。た

ろうい他御の赴く道中ゆく山賊の奪去られ贖良人の殺され繼女を喪れて
 その身の實子を救ふ為、仇は二賊の後より、妻妻あり一人の女の深
 山に七輪と光陰を送り、是則は出でて汝の返る悪報を曉得る事
 たの如く淫婦の筑摩の祭祀ありとある載く銅のくちくちを
 の。されば罪障の只妬怒の人の悪業を悪心ありて目今これを頼に
 と。その厄解けく志を初の時近きある然れば折るる御道すまののあり
 浮世の業ありあつても、故御ありけり、これ亦命を運ぶるを良人の
 殺されの色も迷ひく家と忘れ妻子にのる勤をあげ、離別を後悔せし人の
 債も贖と父祖相傳の家産を果せし悪報をのりせん、女児の喪せしも
 親の因果の子に報餘殃と悟る怨もあり、好むもその身返しく已むま
 人を怨むま、よき行状を慎むもの、一日も煩惱あると、されば歌の、あはれ
 心を掲る墨の、これら枉はあろ習ひあろ、放と説示して立別せんとする程、阿
 夏は羞る頭を擡て遠く掖苗の縛を論に身の罪障を今と志す、世明の
 酔の醒ゆれども、心のこころ見珠之、父久後、渠々命運のありあらん吉
 内、今も心よのほのほ、や鬼毛の頭、置く露を、たとも示さる、請問合
 法師の頭も、ち掉さる、益もある、親子の厄の解、意の意外の幸、以て
 久後、示せと、糠と吐く槽、及ばぬ、限りの、天機を漏さず、
 なる袖、ち拂ひ復立、去る程、阿夏、又掖苗、何れ、阿夏、法
 師、大焦燥、其処退き、杖振奉、阿夏、拳と破と、歐つ歐れて、吐嗟と叫び、る声、
 阿夏、駭覺て、四下され、其怨あり、身、海地、坑の邊、寝る、目、自、假
 寐の、夢、る、れ、覺て、の後、胸、推拍、心、鎮め、紙、憲、仰、瞻、目、影、り、

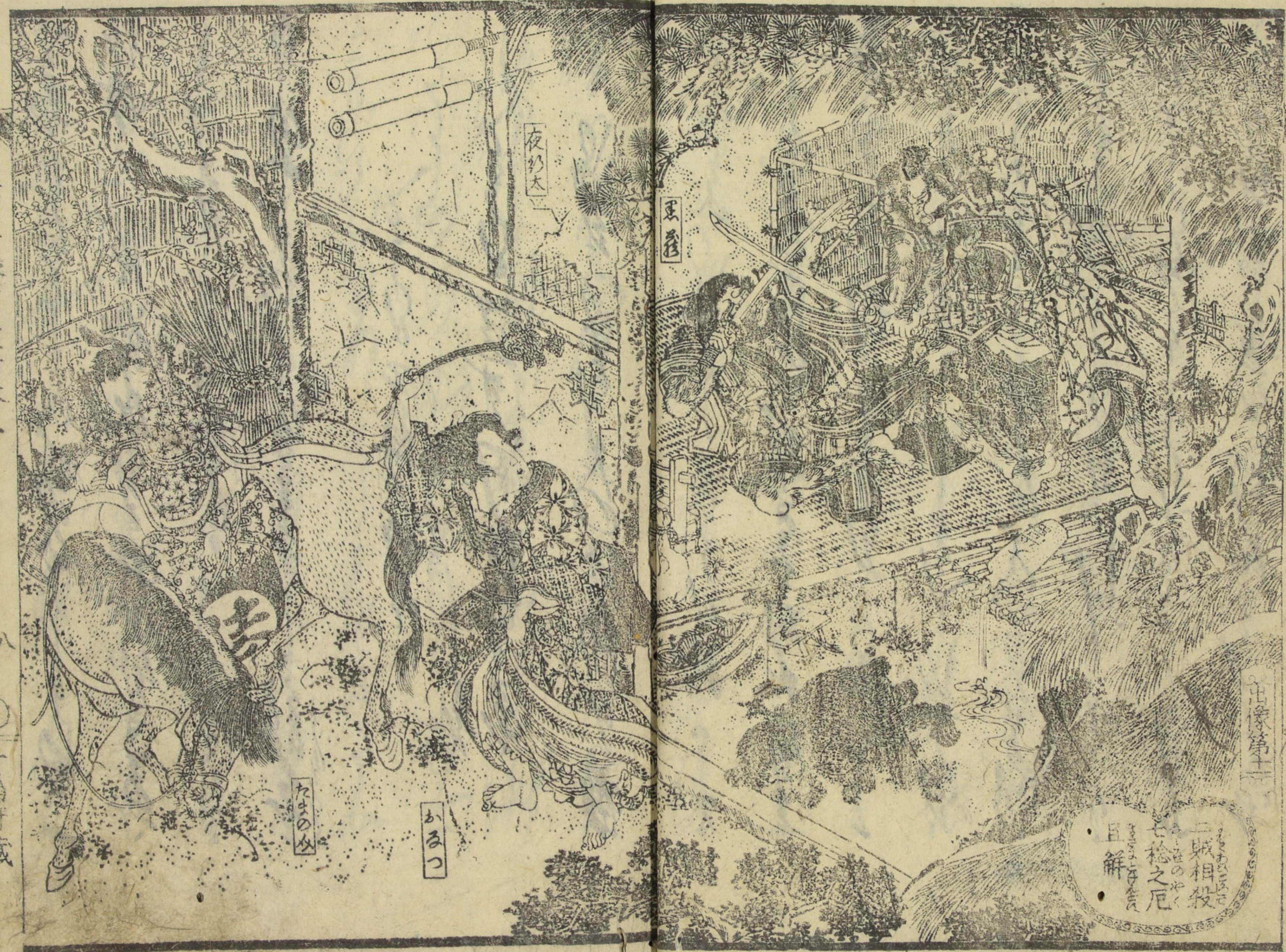
ろうい他御の赴く道中ゆく山賊の奪去られ贖良人の殺され繼女を喪れて
 その身の實子を救ふ為、仇は二賊の後より、妻妻あり一人の女の深
 山に七輪と光陰を送り、是則は出でて汝の返る悪報を曉得る事
 たの如く淫婦の筑摩の祭祀ありとある載く銅のくちくちを
 の。されば罪障の只妬怒の人の悪業を悪心ありて目今これを頼に
 と。その厄解けく志を初の時近きある然れば折るる御道すまののあり
 浮世の業ありあつても、故御ありけり、これ亦命を運ぶるを良人の
 殺されの色も迷ひく家と忘れ妻子にのる勤をあげ、離別を後悔せし人の
 債も贖と父祖相傳の家産を果せし悪報をのりせん、女児の喪せしも
 親の因果の子に報餘殃と悟る怨もあり、好むもその身返しく已むま
 人を怨むま、よき行状を慎むもの、一日も煩惱あると、されば歌の、あはれ
 心を掲る墨の、これら枉はあろ習ひあろ、放と説示して立別せんとする程、阿
 夏は羞る頭を擡て遠く掖苗の縛を論に身の罪障を今と志す、世明の
 酔の醒ゆれども、心のこころ見珠之、父久後、渠々命運のありあらん吉
 内、今も心よのほのほ、や鬼毛の頭、置く露を、たとも示さる、請問合
 法師の頭も、ち掉さる、益もある、親子の厄の解、意の意外の幸、以て
 久後、示せと、糠と吐く槽、及ばぬ、限りの、天機を漏さず、
 なる袖、ち拂ひ復立、去る程、阿夏、又掖苗、何れ、阿夏、法
 師、大焦燥、其処退き、杖振奉、阿夏、拳と破と、歐つ歐れて、吐嗟と叫び、る声、
 阿夏、駭覺て、四下され、其怨あり、身、海地、坑の邊、寝る、目、自、假
 寐の、夢、る、れ、覺て、の後、胸、推拍、心、鎮め、紙、憲、仰、瞻、目、影、り、

時つづくと一夢を夢とて教化せられ行僧の年来信なる観音井の中を
 見るの猶も菩薩の示現する親子の厄の解んと近きありと示さるる終りの
 験もふも然る事との機臨して志をゆるがすの事と宣せし抑甚因縁
 のあやむらんと思ひさるる歩みを凝らね折るる深を渡る鼠のそ然と欲せし
 衷々と鳴るる堪もあけん地炕の辺へ忽地礮と墜りて阿夏吐嗟と駭たる
 それの鼠もあやむと煤け紙の包も物の吊緒断離れと梁の上より又の隊
 れの鼠も緒を啜絶り然然とまの目茶を勢ひく緒のあつら断離さるる
 のる歳黒もあつと来りての梁も敷も貯措さる毒石も今と思ひ
 五六年を伏中ぐぬまの措忘れさるる物の隊も亦奇なる思ひ
 思も獨覚余とち笑く肚裏もあつる御向黒も心祝の酒醺せん
 れの足究竟の折るる毒石と酒も浸して両箇の漢も薦める磨磨
 殺され一木偶ぬと小夏かぬ小怨を復さるる俺們親子の後を
 山も里も到らんて厄の解んと女子の所行も似ける
 伎倆もせせ己も仇も殺も埋れ果る恥を雪ふと
 現も親子の厄の解んと志をゆるがすの事と宣せし抑甚因縁
 親も奥も人の睥りも覺外も人もあつる又謀をひんと欲するも終
 りて悔のそ嗚呼もあつる只管も修心と鬼やの編小件の毒石の紙も
 関火箸の塊と打鉄も黒も活くと来る罇も入れ酒も浸してその餘も
 紙も包み筆も下へ隠せし四下のうちを左も右も胸も安らね
 試も茶碗も親とて色濁りも躬も茶碗も共信に密と外面投棄て
 更も亦尋思もあつる大瀆り酒を薦めし疑も禍も身も及ぶ
 珠も女も殺されん然も酒も棄るる替もせん酒もあつる

辨少筆錄第一輯卷五

六

辨少筆錄



夜の大

王

たのぬ

かまつ

二城相殺
七松之厄
且解

新編 義経 巻五

画像 第十一

おれらの談を告ぐ暇も心づゝけりぬはばいそあれ野干玉の今宵の酒麴の料
 とて今朝酒と活りとまらぬもの足らぬと西へ通黒馬にて常もあつた馳走能は
 意中の物のおれはよく用心をぬと誠なる事此の夜行大敷馬は且怒りてよめる必
 畜生奴が五匹姫婿の心行く一箇の婦人を鞆配めと若奴も賞哉せりめり分過たる
 幸ひもあつた足ると知りて五と害せんと謀る事今もあれ又の赤矢庭の若頭敷
 落してこの憤怨を散らすと敷置極く罵つて心と絞推鎮め更又阿夏が對ひく
 現儀一れとあつた誠心と疑ひかぬぬとも黒三が活のとまらぬ酒あつてさるへとの阿
 夏のあつたあつたあつた三洋樽と腕挽け小引提ぐ地炕の邊小撲地と指く夜行太
 中を引提ぐ茶碗を索と指く酒果と濁りたる酒と十二分の疑ひあつたから
 嘗てとまらぬとあつた彼此とまらぬ年来養れ老猿猴の意の夕日と會つては隔子の
 下にさるへ阿様とて呼立膝うち鳴りて跳下すあつたの身邊あつた猿猴の件
 酒を與れぬ猿猴の茶碗を両手に受てとては飲竭せとも飽きあつた茶碗と故
 さつた雷雷を幾遍とさつた指く指く指く忽地小阿と叫びてと張り足とさつた
 阿苦む七顛八倒血を吐くと驟く九疇敷まで朱を添て啼泣時あつた息絶る夜行太
 この光景にさる阿夏と疑ふと憤胸小盈て黒三を恨めと息絶る嘆息とて嗚呼危
 災まゝの酒と知るとてつれ笑ひりさる猿猴のどくると其首の底まで黒三は何と知
 るの吾妹子の吾に誠のあれと賞はべくと屢々言ひてはつたと鈍しと阿夏の目前小大
 毒の驗小妹々髪をさる小駭怖れ舌を振て共侶小嗟嘆し現争れぬ毒酒の效驗ま
 代して命を贈り阿様最期の痛すまるとこれ就ても珠之次小獵とさるあつた
 の間小夜行大の珠刃磨き準備の巨刀黒三邊と候とつたと知れと黒三一隻の
 免と肩小被け及一箇の鯉鮒を引提てあつた門より声をぬり立ち哥々も看も整ふ
 たり是れと誇り小を録頬にさる御免と監とさるあつた夜行太眼と睜と

黒之汝の女色小惑ふてこれを害せんと謀りて木の樹の喫ぬ毒酒の返報覚期き
 と罵りて託らむ巨刀晃りと引抜き左の肩尖りと研み破れて駭く黒云は何のぞ
 と云ふのふ言風追違ふされ腰より力と抜合しと受流しと先途と戦ひて阿夏と
 既小計のてこの頃の隨ふるの刃小怖く有敷き女子の法法や防るや陽制ま
 身を措くも次の一室小逃龍と破と用き蒸襖の建附り死間より勝負のやと
 窺たり然程小黒云の已と云ふを夜行太と戦ふ大刀音のと烈しく一上二下と樹を斫り夜
 行太も亦瘡を肩より此彼共の身の中より流る鮮血此の怯ま命限りの奮撃を突
 戦西虎山谷小肉と争ひ毒龍深潭小珠と挑むものやあんと要むる小進退
 くこの為れはのく眉よりさきの深穢小哀果々相撃小刺串れて死なける。

第九回

駿馬流小臨く母子を全うせ
 美玉女と故く孤客を留む

天細恢々疎中く漏さむ杖も十々鬼夜行太の阿夏巧言の葉小説念
 不覚小悠々と大く黒云を恨みしより敷つ敷れ共侶小尊し命を隠せし是積
 悪の眞罰ののくあぬ死のるから極力餘のあものけりこの智足なる故ま阿夏
 輒く本意と遂くさき隔亮と推用て去り両箇の亡骸と一同許ある下り
 むる得とえく呼吸絶つとあふむをさる胸のあはれもさる落著身身性方定む
 むる面杖をばくとらち按トるの折る珠之みのけも終日彼此と捕らるる獲れ
 なく只徒小も来りしと強き捷徑の阻陰はひのりある黄昏のるる邊り母所
 よ只今更の光と呼りけてと縁頬より登ると夜行太と黒云が血に塗れたあ亡
 骸とをくあふふと駭駭とせぬまの命をばらうと後泊せしと又渡りき揚て四下放
 睨と立るが小暗の方小恙のあふる母親をえんとて母の其処小をせ欲死身小傷
 るりしと向く側小立ると喃母のうさる兩箇の多々さるの俱小刃小伏しひの故と

あふめいふぢやと屢問はらち領へ阿夏形も更めて珠之父平ふやまのまじり
 までの情由とぞ告げのけられし人々今も海客多き公の鏡すまのこころ
 訝る珠之父噫らるるはなまきまの遠く親ゆゑを是何ぞやと問へ阿夏目を
 たれて可愛き情由と知れれば疑ひ理り今を告ぐは夜行大と黒三々
 とるこの為は親の仇義理ある姉の怨敵をがと諱を言葉の緒と分る珠之父
 膝に進めて喃母れこの入をいふを為親と姉との讐言をいふをそよ年来身と任
 ちあちあちの隔めあを連添ゆひまろるるゆかりと詰れば阿夏の恥らしはれ
 とのりるれ年久倍く理も聴かざる見報も今も恥かき多所ゆきまの身と
 両箇の讐言不仕せし只をまの可愛と投殺されとせ折小事もゆめ玉緒の秋
 よう七松の長月日と深山樹の日蔭は育一艱難苦勞の言一朝も盡されや
 る小且あて門の戸をよ鎖へあひの身も立わたり板厨を開て御は菅薦をよ

三布七布蒲團をよ彼此と両箇の死骸わらち被せ又念ひま行燈の置所を
 血と輝て輝見引裂く片袖小鼻と掩ぢ地爐多埋火小徐と指置り
 火の光り高く仰意を引寄せと掛るも辛苦不獲て細索小戸走り輕に錢車背門
 へも遠る珠之父前後の門の戸鎖固め舊の外小走り来り母小對せや母はこれ一緯の
 趣を詳小言まほ一そく小一ゆひのこころ阿夏のこころをよ俛俯引りてあ珠之父
 皆の五岳の素より京師の歌妓親の時まで世不知れる女歌舞伎の長小と屋号を
 笠巻と呼き入る小京師も年あまの兵乱は荒果より生活も亦衰て常歌舞妓の
 勾欄絶へ吾侪の舞と糸竹の技の細朝夕の煙と立ちあけ此をよの父をよ公神
 風の伊勢の安瀆る高買をよ未松屋水偶成とらん喚れる吾侪と負の客まりか
 遊興小身と湯やと債のの家と妻の伊勢を妻子親類小疎果られ離別とあ
 る死身とあひの獨女と推して五岳の宿所をよ舟をよ客をよの時受る思妻の

師の親類より周防洲山口の大内家の御内人の陶瀬十郎貞房と号す。其の
 たの叔父でござる人京師に在番して四稔許在り。此を以て其の生れりければ襦
 袢の中より愛蔵して何れとて東西の二年々贈り賜て然る程の瀬十郎
 ぬの行末のありとて三歳の秋朔月主君の氣色を案ずりて周防へ還さる
 めひかども年尚ほ身おれが恙もなくて彼地をまゝに宿願の語て行血脈の叔
 父でござるも表向う親族ならぬ宿願の對面せられて後かたるの素生を報よ
 り名告め日見の徴ありといひ右を引りて是を以て其の甲より真一文字の青
 筋あり又叔父君の甲の甲ありと相似る青筋あり。其の甲ありとて眉上
 ある黒子より自然と肖るる叔父の明徴でなればとも黒子の似る外あり。其の
 甲の甲の青筋を類あり及再會の符契は疑りて必愛顧あるんか。其の
 忘るるも其の生れり。此賣り公翁が云云と識して贈り一期の命運吉う以欽

ゆる講書著のあり知らねども。騎帯産毛共侶の護身事裏の中あり。今より
 の習字を回を心おけて懋よ。漢文を克讀習ひ。買り公翁の判断も定か知る
 時あり。以て措き是等ののり。名残惜や。とらば。夜行太ボ亡體の邊に
 あり。血刀を捨て合の直とて呪ふ突立んとる程の吐嗟と騒ぐ珠之女の泣き
 そのもどろ禁めり。あり母何事ぞ。おんが自殺あり。五身ひら。その山は何處
 とく救せられた。之餘の。其の。且の刃を放ちて。と。諫め。阿良の
 よ。又は。叔父の死ぬも死れ。と。刀を捨て伏せ。珠之女の堪難。涙を流す
 押拭いて。嗚呼。は。知る。過る。已。素生。苦心。定。知られ。今
 ち。計。此。彼。共。自。滅。取。死。心。雪。身。清。され。後。優。れ
 ぬ。れ。山。出。共。周。防。赴。下。然。心。憐。死。の。身。の。操。は。吾

侘の誰とらら草の路覚東の山とて遠く周防の叔父公を詔便著
 あらや命の物種るれが七稔以未生延く浮世の帰さけの事ありたの事をあり
 ぬる事とらふ阿夏は頭を擡て通微妙くいれり十の満ちぬるの惺惚と現
 陶師の匠なり然れ吾侪も存命をるる旅宿の後見き俱に山口ゆへけ
 就く相譚ふとヨヌる夕膳果と後おそこの領く珠之友も等しく庵偏よ退
 かく送の筆者とり膳の夜食るるの親梳と子母のる横向に餓る腹を繕ひ
 けり當下阿夏の沈吟と珠之友をえりり年来五侪が密なる小あらし總く
 山ヨヌる山又山る深山路の弥が上生茂とる某菅藤甚ふ山則路とる推
 夫由らぬ嶮嶮の路と必迷ふて一日の人家ある地方ぬとあら今借と思
 惟るは馬の舊原一路と忘れざ在ける果は還るものもと京中へ人な懐いとあり幸
 いるる日の彼人達が奪やとあやう馬を深山の御導守めく出る里小

到りて然ると死の事と吾侪が足と休と兼下に行きも盤纏も皆附人足は
 優る便利の由膏より練より飼くヨ喜準備をまぬく吾侪の馬頭觀音大
 士参りてる由久後の利益を禱りまらんまはゆる自滅せやあの人々の難言るら
 七稔とるを類れる庇覆る一とひび下情の情仇の仇切く雨箇の亡骸今
 膏瘞く首途せんともこの事を夜更よかとのを珠之友の母あむ母出で箇言ま
 就中那馬の俺們親子のあふとく佛の賜ひのあやあらんと観音入まあり
 練のののるるの阿夏の秋びく昔の山は出行水多し月を燭し程近は彼
 觀立目へ詰けるその間の珠之友の馬小飽まで練を飼く母の帰る候程は阿夏の
 久し祈念と凝して昔の山は下り歸り來り又夜行太と黒云が亡骸を瘞んといふ
 珠之友含笑て母よとのと急だる期お至りせんまあり吾侪の夫大く疲勞なり
 所々時寝まりて後ふとと辞して納戸の退は板厨の蒲團より卸し臥まりて

まゝくと鼻聲幽小なえけの阿夏これぞをくも。惺惚しければ有鞍馬童頼甲
 斐る睡のゆたされつとてさるもさるもとて瘞んぬりと難る聖の準備を急んたく脚
 絆杖笠あれ彼と行装を敷へく有とある錢帛をむとる集め草財囊を飲めと
 馬小肩したる餘衣裳も二袱小包も馬の鞍下に結び附る程十日の月の
 没果し夜の深て山静く有右而阿夏の臥房へ入る睡んとる宿も寝られどこの曉
 ぐお起半が飯のきのの餘りの炊く小及び茶を沸らくと珠之友と呼覚し親子等
 多く早飯となして夫の日一目的割籠の準備をく阿夏又彼亡骸と擡中と瘞
 んとる珠之友推禁め母れその美の心安れ吾侪疾より分別あり益るたふあは
 擡中り錢一丈でも取送一息生涯の損るの盤纏のふまのゆると阿夏
 本意さげぬされど金の錢も草の財囊を送る容て衣裳と共に馬小附る夜の
 どの盤纏もあれ盤纏の分ちと吾侪ととるの腰の著るたのふれとも重なるれ山路
 程馬小肩とゆなれ心おのる亡骸とあれ拵措る狼の腹を肥さんともさるの
 分別心のさるはととも思ふよりある飲と回へ珠之友の空嘯はくさるで苦勞はる
 まるると天の明る出ぬと促ま声と共に小森を離る鳥の音小阿夏今も
 猶豫もゆるる草鞋穿締めをり立ち牽出と馬小うち對ひて吾生るのこの
 喜怒哀楽の七情のありつらん小吾のよとほのけも吾侪親子の七稔以来不善
 人の隱宅ありるも伴れて憂歲月を送り小その窮厄の稍解て故郷へ還る
 熟びのりさるもの小盤纏ととるさるのけのあはれものさるの昔の羨ま主を昔本
 夢の然る今も拾てゆふのの材狼の害を脱るよりあはれやよりとさるも
 共侶の昔里へ返る就て吾侪のを出て里に至らん路を知らざるの御道は頼
 むの俺們親子とち棄してさる昔來一路の然るさるの主は素
 ねく其処へ返るよや故主の知れざるも愛する若小高良子んぢとさる飲と町

うち眺めたりと今より十稔前より比緑野亭ののびたるふらけきく陶師と再
 ありての青の首尾の末のゆき西東別々て散る花の洛も外なるゆきたけの立ふ
 草枕旅の宿りを何処ぞと定めぬ近江路のあつて過て来一方を以て夢の世
 るのたのち敷たをのびる岩が根はひ岨はひ危く馬乗放の母も辛
 まく山路あり或の疎林枝をまて馬上の頭髪を取んとすれ鞍伏の路
 あり谷深くと峯高く苔滑らる石をたれ戦々として馬蹄の踏んを踏流
 遠く音のまばそく水と掬りより流折の濁り梅林をのび道もむす既にあり
 亭午比馬を駐めり路傍る枯草と食まめり親子の土坐て割笠を雨く一破の
 湯も誰のこも人疏飯の噎ぶと心も有敷る猛獸の害怖る中もあつて後久
 ありの泡鶴と馬牽より又乗らる前函幽かんとす後耳然とと雲を吐く那山の
 是何処の高山峯を颯々として風調の琴曲是這山の松のりり嚶々と鳴く鳥の

声の友を求めり窮谷より喬木小遷るわやわらん蔓延と懸る枯藤の枝の
 引れて蟾蜍の断離るもの似たりけり目のなるの耳のなるの心寂しくも悲し
 みる河夏のの願観音菩薩の御名を唱へ甘み冷く汗を流せども珠之
 々の物とも思ふ馬の上るる睡りての滾落んとせしり屋敷の冬の日短く下哺の
 るこれども人衆の処に到るれは前路の溪川のその廣凡五六間流
 速く音凄れ水中の嵐あり砕け左右へ落る橋のわあんと伸ちて四下を
 遠くみるさても橋のゆるたぬ馬の川邊に駐ると主共侶の眺めたり阿夏ら
 これも駭を患ひてあつて珠之の一日の山路を来し甲斐もるるの速河の流ら
 れ今宵をあら立時を猛獸の害害あらん然れを液瀬を知れ騎入る
 へもあつて珠之の女に竹のあつて流の速くとも馬の三頭を越えたるあり
 せ一取もる衆疾しく一鞭拍る輒く渡らん身は吾侪と立替りて前鞍の

みる金銀衣裳と失ふつと惜む不足は只御佛の方便の件多し。這難
 難と昔話する日もある。誘ひて下りて珠之次舌うち鳴して後、先小
 たち暮ぬ間中と走れども、里の地も著るを日没月半日升て天よ暗て
 風も前路の大さ甘番山と処々川果一山田あれ住む人あんと歩も
 進んで又とつ程の一番最繁る冬樹の邊の燈火の光洩り内々見え親
 子の轍魚の江の臨み狐の林もあざとくあらゆれば、頻り走り、走り著て
 果と白屋の扉の戸ら敲き行かした同行二人の宿は、宿は呼門
 けり當下、裡面より訛声立て今宵のあ、取系要の一談あれ、村の裏の此彼と
 取合合れて今商量の最中之右冗紛る折れ、お宿の慥いひ、その強面
 く答るを阿夏も推返して、宜しう、然るとも、五里の路、迷ひ、知ぬ
 深山の入り、賊も趕れ、卒と脱れて、あま、筆良子、下り、柴藪屋でも

臥房の厭ひ、つら、宵、道、め、ひ、と、珠、之、次、共、侶、小、幾、遍、と、多、呼、り、て、立、去
 り、も、あ、れ、の、裡、面、の、老、女、の、声、と、と、皆、け、の、女、子、と、立、里、と、も、路、迷、ひ、山、裏、に
 追、れ、入、る、と、難、義、小、あ、ん、ど、の、甲、夜、火、臥、房、の、あ、る、と、露、路、宿、の、危、儀
 と、あ、れ、飯、も、な、れ、と、這、冗、紛、で、炊、火、を、進、ま、る、暇、も、な、く、好、と、い、れ、宿、と、い、ふ、も
 世、の、情、旅、の、伴、侶、兩、箇、の、衆、の、い、つ、も、言、れ、る、ん、愛、々、の、あ、る、能、を、得、心、で、泊、り
 の、誘、且、裡、面、の、入、り、と、い、つ、と、門、の、戸、を、開、き、選、と、阿、夏、も、ち、微、笑、り、會
 其、と、の、後、一、條、の、小、道、を、許、と、遠、く、草、鞋、鮮、捨、珠、之、次、と、俱、引、れ、て、母、屋、を、
 實、子、小、隣、登、る、這、時、地、炕、の、邊、の、家、の、ま、ま、と、本、邸、の、故、老、五、六、名、甲、乙、團
 坐、考、へ、り、一、分、齊、一、阿、夏、を、さ、る、と、女、中、と、息、子、共、侶、小、地、炕、の、縁、へ、ち、寄、り、足、踏、伸
 ち、温、ま、り、の、抑、も、身、の、何、処、も、何、地、赴、れ、と、同、く、は、夏、の、膝、を、進、め、く、吾
 倚、京、師、の、お、け、の、近、属、良、人、の、身、ま、る、と、便、著、有、り、の、鎌、倉、の、由、縁、の、人、を

心當り獨子推して這回が初旅命の今朝の路も迷ふてはるる山入りし。徒ふ日を消し折る一箇の山豪の撞見つ痛く趕れて行李も盤纏も皆ら捨て脱れしをぬく這里の山若者の突と聲言又なるふり購るを家比自を嗟嘆らと痛き心か息子を推する女中の初旅其首と入て悪棍の剪徑せんと跟るらん。多かれも運つて命めて逃果せの切りのふるや。嘯爐邊へ寄ぬ山茶の罐子の沸りたり聊の介意せどもうら返り咳りぬ。阿夏珠之友をえへる進とよてあつ夫婦ふち對ひてお夏更なる圍坐の中へ今宵の宿の一刻千金の情心ゆるり。就てその地へ近江の中何と喚ぶ村を願ふか身の姓名も具小ぼさく欲らん。とまあ下の領地へ同く如くもれとの美濃近江の封疆を山嶺と越て東に到れば美濃洲池田郡又信濃の鄰とする。の近江は坂田郡久礼畑庄池田郡公良も其名を

宿六と喚ぶ村の數代の貧農を妻を何可加とりのかん身が京師に入る。這田舎備ふる為体と痛く思はん旅宿の殊さう直愛のふる小尚総角の息子を俱前路遠る女人の道中こそ前か徑に趕威されて行李も路費も送りも喪ひのひりれぬ中へ又推量られて痛きくても思はん大凡人の愛惜富たる人も異なる。あるいひのれとま。この地へ福富大夫次と喚ぶといと優富長者の福富三池落合の御今畑入谷る。この合保十ヶ村を差配する大庄屋で山田火田の家の家衆十名の奴婢を使ひ織出は近江布を京録倉へ賣渡す。又山野の牧あて半馬許を養殖して年々小賣出の富貴上も富貴で足ざるのひりれども。孫女の弄言を取らぬひ五色の玉の。目小喪うとと索求め今も休ませた件玉の五顆もの色各々同く。玉の裡の人物宮殿山花鳥の種々多鏤れ。如く透徹して定る不目あるのふれん。



大支次

下の方

あまつ



大支次
あまつ

あまつ

あまつ

あまつ

出像

苗守為争ふ。其の末、俟の可加。挑灯せ。然と。其の果。其の各人の各より。明。這月夜。挑灯引。提て。何かせ。客人。達。金剛。を。以て。簀子。の下。探。り。草履。二。直。高。夏。推。退。け。と。憚。り。珠。の。幸。を。得。て。戴。く。珠。之。及。玉。の。風。吹。り。峰。の。魁。を。落。れ。言。の。葉。も。多。身。勝。多。人。あ。る。然。る。吉。左。右。俟。と。目。送。る。衆。人。出。て。夫。婦。相。槌。の。楯。を。帯。く。庭。口。詛。阿。夏。親。子。の。謀。々。の。声。を。聞。く。鐘。牙。の。五。更。の。比。立。女。富。村。人。の。上。の。道。名。も。甚。だ。福。富。の。宿。所。を。投。て。急。死。けり。

第十回 関帝廟の少年義を結ぶ 福富村の幼女別を惜む

却説阿夏珠之及の宿六夫婦を先立してゆくと。凡十町許福富村の末の。昔の。左。右。の。幾。十。間。の。土。堀。を。折。遠。く。大。荘。宅。前。面。を。登。時。阿。可。加。阿。夏。亦。目。今。伴。ひ。ま。ら。き。福。富。の。那。首。小。と。の。間。を。近。つ。外。

面より入る。這土堀の那方。妙高。古。松。杉。の。幾。株。を。最。大。に。這。方。に。斬。て。穿。鏡。と。橋。の。長。と。廣。を。石。三。枚。を。渡。り。引。隨。由。も。子。の。角。門。に。進。入。る。母。屋。を。の。り。遠。く。一。町。の。下。建。つ。土。庫。の。月。影。白。壁。光。り。字。母。號。も。定。く。讀。ま。山。腹。村。落。の。豪。家。は。あ。り。と。今。の。夜。驚。死。阿。夏。の。珠。之。及。引。著。て。去。園。の。傍。の。竹。垣。の。下。ま。き。束。を。登。時。宿。六。を。阿。可。加。と。急。呼。び。て。その。後。後。堂。も。死。に。縛。云。と。報。ま。う。ね。吾。侪。の。客。人。達。と。俱。回。答。を。俟。と。阿。可。加。領。を。と。り。且。俟。せ。阿。夏。親。子。の。會。釋。と。う。庵。溜。口。を。進。入。る。程。阿。夏。亦。阿。可。加。を。俟。小。良。あり。と。れ。の。雨。三。箇。の。老。僕。小。厮。亦。正。と。玄。關。の。側。の。戸。を。推。開。紙。燭。を。抗。て。宿。六。雙。の。首。由。の。旅。の。女。市。と。の。宿。六。誘。々。と。阿。夏。親。子。と。急。と。俱。小。老。僕。亦。對。ひ。て。送。の。口。詛。言。訖。れ。老。僕。阿。夏。珠。之。及。を。引。く。客。房。小。赴。く。宿。六。後。亦。阿。夏。亦。次。の。坐。席。の。上。下。小。菊。

燈臺に置かれ明かす昏小燈より先僕も既小退きて立代小断亦甘茶とて果干
 菓子とて果干阿夏珠之次小薦めり茶碗の對の錦も也菓子四も亦鄙俗なる物也
 ぬ玉珠之次小餓の堪候件の要引よりかきとて抗と味と阿夏珠も其の尻目も
 意とて禁れらるるの甲斐ある左右の程小阿可加の興よりかきとて宿六より對の
 一談を興するの云々と報する甘茶の家も亦かきとてかきとて今對面
 との丑とてかきとて宣ひをい問かあり大夫次よりかきとて客房の中より上座に推處り宿
 六夫婦より對して旅人を案内の実義を勞ひ次小阿夏珠より對してかきとて初の見
 參りては先拙の當所の柱役福富大夫次と呼ぶもの大々宿六夫婦の物よりかき
 れるん中の人都人でもかきより尚總角多子息を候へる旅宿の艱苦をかきとて
 先拙が最愛の孫女のか今茲の年七才也名を黄金と喚ばる涼の秘藏の
 五色の玉ものる目とを失ひては惜む限りもかきとて夜も目もかきとて泣くもの
 生らん病のせせと波多共侶小曾を苦め人を替術をせし賺のり索りこれ玉の性
 知る小よりかきとて小女中も五色の玉の相似るを所かきとて宿の内小女中も玉果
 きてつ孫女の愛するはと似ては價のりもかきとて厭は推多かきとて金持りこれ
 阿夏珠の膝を進めとてその宿のあつ小女中もかきとて誘引れ夜を犯して見參ふ侍り
 妾の手これ傍りとて心衣領小拭り護身書卷の御解披して中かきとて五顆の玉を
 大夫次をさる小受之懐紙度の間より取出る眼鏡の匂を左の耳小斜被けて引き燭
 其の火光小響とて彼此とて思ふ膝うち鳴りと奇る哉呼多かきとて這玉果黄
 金が玉組緒の色も此も違ひも抑かきとて這玉何処よりかきとて藏春久かきとて
 ぬわと詰れ阿夏珠阿容なる色も疑ひの理り之の玉の親より相傳のりかきとて
 ら又購取るものもかきとて途を拾ひ先や具小告まらん昨夕の宿を今朝
 たちとてかきとて岐道小迷り山路小見鎖一刺山家小狂れる路次の危難も其

たしとてかきとて岐道小迷り山路小見鎖一刺山家小狂れる路次の危難も其
 美作新編 第一卷 車巻

幾遍とらち戴死愛玩なく餘念多く具ももた放さず只是死の既老妻
 媳婦も見不被とるの如く述を欲ま夜も中近は長途の疲勞も
 死を心づる所必れと立との候つて後堂で薄茶を進ら女子息共
 侶誘ふといふ阿夏推辞難て歩けり今宵の宿酒食も風爐も吐き
 数待小物足と旅路の眞苦當分は然るも奥の連の死目も多るを
 辞ひゆゑと回答せられ夫次合笑多る領を誘ひ立く奥もた編室伴ひ
 けり妻子の居の室も夫次が妻也倉媳婦の阿健孫女の黄金も送る聚
 合も登時夫次が上座進坐半之妻と媳婦と阿夏親子引あらく云ふは
 倉の媳阿健も膝推向け態懃初対面の口誼を演喪る玉もく返されり
 然の被言言無も一樹の陰他生の縁と縁類の障子と昔の謙退を阿夏止宿は管
 待の然と述るる辭の同席の席も人々執視る小中倉と五十許瘦肉の辭

寡阿健既小下の上五六わやまうら合共尋常多か女甲の黄金の
 唐清らふと玉のぞ眉目容貌の母も優まる卵の中春の唐鳥尚葉花
 のち後の色香とみられて人の子も愛るものの子て慰れ生倉阿健珠之
 浸るる紋致と譽めたるの側の招近つけ名を問ひ又年才と問て壺る菓子を取ら
 せれ黄金も亦珠之を愛終る面色も岩麴架の下措れ繪巻の箱とら披れて
 珠之双不ぞ珠之双を押し黄金と俱小燈燭の下にうつり登時夫次
 又阿夏うち對ひて宣ふ不思議の縁も人のうも誠ある志を感する件
 玉の来歴と詳ふん言多今も十稔も永正二年の夏比老拙一日草野牛の蛇
 野蟻と高く巻る梯繩小相似るとるあり是も世も蛇籠の中空宝貨
 あり。尚これをいふもの富栄とてとと豫て候るよりわれ快らぬのありあれど慾の
 為此の厭も単衣の袖巻揚て羣蛇の中筆とさ入れ撥撈る程小果を物あり心

飲ひて中つてつらくれば件に至り初五顆連して早放りて一室を宿所として還
 して妻を示し一室を程に奇きるる件に至りあつた不離れに細微の穴を末に身を
 真紅の緒不申で入るは秘蔵しつては後吾家の生業年々不幸ありて耕
 作交易牧馬の利まで五倍十倍の三胤餘ありて四十年を送る程に娘を何健と有
 身にも臨月の過れも分娩は元氣をこるれ其の母は老拙夫婦も安んじ心加
 新田の醫師を召して茶を徴め加持の祈禱をせざるおゝと十二月に及ぶまで産の
 初を解るる有如之程を行僧と一宵宿せしありは殊勝の老僧を引ければ廻娘婦の
 めも告て安産の祈禱を請ひ件の聖者ら言てその日易に赤方あり竊に蛇脱戎
 前七娘も飲め安産疑ひるものへ祈念祈禱の効多と教て次の日出ては死
 現然するものありせんとしひければつて求治り一蛇の衣を向健と告むと前下
 られを飲せよとの夜猛不産の氣死て安んじ産の女の子也則ち黄金之母の子

交健も肥きて恙あるとる一室初孫のありわれ波多共侶不の身は終に愛終る年
 稍二三より比に寵愛のあり件の玉と出とのやれ黄金大く愛飲して餘の玩
 器のふも觸れ只玉をの身引つけと取んとははち泣くは穢見も勝と一の
 けは護身囊と共侶不年来腰不著さうる不喪ひと孫と泣く孫より泣くは老
 拙が愛惜の心弥すて憂苦お治堪むありける不玉を不拾れてもは今宵返さ
 飲ひて亦何不壁言んある天縁といふまのまま去る穢一の穿徹金大なる所不
 是途不捨る然然其祈禱の利益多との偷見奴が送すある不の如
 寡慾の婦人おある所の女誰うと来とま返さ感さる不有餘あり誠心ありと
 有るければ何とせん身の久話不似れは老拙一箇の孩見中廻娘婦の良を
 福富大夫五と呼れる今茲に二十七歳ふられ今戦國の習俗を耕すのの鋒を
 舞一商賈の太刀を帯へるぬればつて見大夫五も只武士とのま流々生業と上とせ

美山三鏡第二輯卷五

五

